

長与国民学校高田分校

長与町では、平和への祈念と被爆体験の継承を目的として、高田郷の九州電力長与変電所近くの道路に、長与国民学校高田分校に関する看板を、平成30年10月10日に設置しました。

昭和20年（1945年）、看板設置箇所の付近に高田分校があり、8月9日の原爆投下時には、多くの負傷者が収容されました。長与町は、原子爆弾で亡くなられた方々を追悼するとともに、二度とこのような惨禍が繰り返されないことを願います。

○「長与国民学校高田分校」説明板

【九州電力長与変電所付近（高田郷）】

ながよこく민がっこうこうだぶんこう 長与国民学校高田分校

平和を繋ごう 次の世代へ



▲長与国民学校高田分校校舎
高田分校には、1年生と2年生の児童が通いました。教室が2つの小さな建物で、現在の九州電力長与変電所の隣地にありました。



原爆救援列車

原爆投下直後から救援列車の運転計画が立てられ、道ノ尾駅を基点として、長崎への救援列車が運行されました。8月9日に4本の救援列車が奔走し、およそ3,500人の負傷者が諫早、大村、川柳の各海軍病院などへ運ばれました。

1945年（昭和20年）8月9日午前11時2分、アメリカのB29爆撃機から投下された原子爆弾が松山町上空で炸裂し、すさまじい熱線と爆風、放射線が地上を襲い、多くの生命が奪われ、多数の負傷者が線路沿いに続々と避難してきました。長与町（当時、長与村）においても、爆風や熱線の影響で家屋などの建物が損壊・焼失し、多くの人々がガラスの破片などで外傷を負いました。当時、1915年（大正4年）創設の長与国民学校高田分校（現在の高田小学校）は、原爆投下時も創設当時の建物が使用されており、その教室には少なくとも100人の負傷者が収容されました。高田分校では、8月14日に針尾海兵団から派遣された救援隊が到着するまでの6日間、地元の婦人会が中心となって負傷者の救援が行われました。その後、高田分校は8月19日に閉鎖され、残った患者は長崎の新興善救護病院に移されました。高田分校の救護所に避難した被爆者の故・福田須磨子氏は、当時の様子を著書

『われなお生きてあり』の中で次のように記しています。『校庭にはテントもなく重傷者がむしろの上にひしめき合うように寝かされ、唸り続けているのだ。～省略～講堂の板の間には、誰が何処から見つけて来たのか、ま新しいむしろを敷いて、負傷者が二列にずらっと並んで寝ている。～省略～』高田分校における死亡者は、近くの山に埋葬されたと伝えられています。その後、高田分校は1956年（昭和31年）に新築校舎に建て替えられ、1967年（昭和42年）に現在の高田小学校の場所に移転するまでの間、多くの児童の学びの場となりました。長与町は、核兵器の廃絶と恒久平和を願い、悲惨な戦争の記憶を後世に伝えるため、この説明板を設置します。

2018年（平成30年）10月 長与町